

# アイヒェンドルフの『予感と 現在』に関する試論

—— キリスト教と異教 ——

丹 治 道 彦

## 序

アイヒェンドルフの出世作である『予感と現在』は、1809年から翌年のベルリン滞在の際に最初の構想が浮び、オーストリアの官吏登用試験を受けるために作者が1810年以来滞在していたウィーンで執筆され、1812年の10月には完成した。出版の機会に恵まれぬまま彼は解放戦争に従軍するが、その折に知りあったフケーの仲介で、『予感と現在』は1815年にニュルンベルクのシュテーク社からフケーの序文をつけて出版された。F. シュレーゲルが『アテネウム断片』（1798）や『ゲーテのマイスターについて』（1798）でゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』（1795/1796. 以下『マイスター』と略す）を熱狂的に讃美して以来、ティークの『フランツ・シュテルンバルトの遍歴』（1798）、ノヴァーリスの『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン』（1802）など、ロマン派の詩人たちは『マイスター』にならって遍歴する主人公を描いた作品を次々と発表した。アイヒェンドルフの『予感と現在』もその系譜に連なる小説の一つである。

貴族の子弟は教育の仕上げに外国の宮廷を歴訪し、各地の貴族と交際して研鑽をつむものとされていたが、<sup>1)</sup> 主人公が貴族であり、その遍歴が貴族の修業旅行として設定されていることから、<sup>2)</sup> 『予感と現在』も一人の人間の成長発展を描いた教養小説の伝統にともかくものよったものと言え

る。しかし、この小説には多くの詩やエピソードが挿入され、ややもすると筋が見失われがちなことから、「しっかりした筋の欠如」(E. Höber. 1894)「生煮えの重くて食べられない粥」(R. Huch. 1902)「単なるエピソードの集合」(W. Killy. 1963)といった否定的な評価が、しばしば下されてきた。<sup>3)</sup>しかし、一つの立場からの言動、行動に終始し、一般的意味での成長発展の見られぬ主人公、枕詞のようなある種の形容詞のくり返しによって一人の女性にまわりつく決定的なイメージなど、『予感と現在』には『マイスター』の影響としては説明できない部分もある、とする読解がないわけではない。本論文の意図は、この二点を手がかりにして『予感と現在』の特性を解明することである。その際に見落せないのは、アイヒェンドルフが生まれながらのカトリック教徒であることから<sup>4)</sup>生ずる「キリスト教と異教」という視点であり、主人公フリードリヒと彼が首都で重要なかわりをもつ美貌の貴婦人ロマーナが考察の対象となる。

## I

本作品の主人公フリードリヒは信仰心の篤い詩人肌の人物として登場し、その人間像は物語の最後まで変わらず維持される。<sup>5)</sup>彼の人格形成に大きく影響しているのが少年時代の読書体験であり、それは友人レオンティンの妹ローザに聞かせる回想の形で語られる。

初めて手にした書物について、フリードリヒは以下のように語る。

Da saß ich denn einsam im Garten und las die *Magelone*, *Genoveva*, die *Heymonskinder* und viele andere ... durch. (HKA. III 53.)<sup>6)</sup>

『マゲローネ』『ゲノヴェーヴァ』『ハイモンの子供達』はいずれも代表的な民衆本で、古い時代の伝説を素材としている。これらを読み耽ることで想像力をはたらかせることを覚えた、と主人公は述べる。

Mein Hofmeister, ein *aufgeklärter* Mann, ... nahm mir die geliebten Bücher weg. ... Ich bekam dafür *Kampe's* Kinderbibliothek.

(HKA. III 54.)

彼の本は家庭教師に取り上げられる。かわりに与えられた児童書は、豆の植え方や傘の作り方など、有用性を志向する教育を目的としたものであるが、これは、家庭教師が「啓蒙された」男と呼ばれること、啓蒙主義の代表的教育者カンペの名が見られることと共に、この時期の教育が、伝説を迷信として否定し、教育・教化の手段としての合目的文学しか認めぬ啓蒙主義の教育だったことを示す。そして、「味もそっけもないこの教育工房」(HKA. III 54.)と回想していることから、そのような教育に対するフリードリヒの反発が読み取れる。<sup>7)</sup>

家庭教師は、キリストの受難物語を読んで聞かせる。<sup>8)</sup> 聞いているだけでは飽き足らなくなった主人公は物語を最後まで読み通し、身も心もそのことで一杯になる。この時の感動がどれほど強烈であったかは、彼自身がこの時期を「自分の全生涯にとって最も決定的な時期」(HKA. III 55.)と言っていることから明らかである。

フリードリヒの読書体験の検証から指摘できるのは、民衆本に代表される伝説との出会いが詩作の前提になっており、受難物語から得た感動が熱烈な信仰の前提になっていることである。そして、民衆本にせよ受難物語にせよ、彼の生涯を方向づけたものが伝説の時代にまでも遡る古い時代のものであり、カンペ流の啓蒙主義教育など、その生きる時代<sup>9)</sup>のものに彼が反発しか示さぬことは重要である。

## II

旅にでる決意・人生の理想を語るフリードリヒの独白に、以下のような部分がある。

Denn wahrhaftig, ein ruhiges, tapferes und *ritterliches* Leben ist jetzt jedem Manne, wie damals, vonnöten. Jedes Weltkind sollte wenigstens jeden Monat eine Nacht im Freyen einsam durchwachen, um ... *sich im Glauben zu stärken und zu erbauen.*

(HKA. III 14.)

ここでは、昔かわらず男子たる者に必要だと彼が主張する生き方が「騎士的」と表現され、それが強固な信仰の構築と結合していることに注意しなくてはならない。はるか時を遡ったものに影響を受けた彼の理想とする生き方は、やはり彼と同時代のものではなく、中世騎士道の流れを汲むものである。<sup>10)</sup>

第一の滞在地であるレオンティンの城と A 氏の館で描かれるのは、作者晩年の回想記『貴族と革命』（生前未発表）で述べられるような、宮廷と没交渉で農業に専念する田舎貴族の生活である。<sup>11)</sup> この単調ではあるが落ちついた環境のなかでフリードリヒは詩作に没頭するが（HKA. III 77.），その文学観は、レオンティンの城での、そこに寄食する詩人ファーバーとのやりとりから知ることができる。

詩人であることには常に手品や綱渡りの要素がつきまとうというファーバーの主張（HKA. III 28.）に対し、フリードリヒは反論する。彼によれば、詩人は古来の美德を身につけた騎士でなくてはならず、腐敗し憎しみに満ちた世界に、言葉と創作で神の精神を告げる者であり、このように宗教性の強い詩人の使命がドイツ的名誉・騎士としての美德と結びつけられていること（HKA. III 29.）は注目し価値を認める。このような見解の対立があるにせよ第一の滞在地での生活が「生涯で最も幸福な時期」（HKA. III 77.）であったのは、フリードリヒの立場は職業詩人であるファーバーのそれとは異なり、<sup>12)</sup> それゆえ、対立する意見に直面しても自分の理想の危機を感じなかったからである。

・第二の滞在地の首都で描かれるのは、主人公の目に映る貴族たちの墮落である。

ある貴婦人のサロンの場面では、技巧を凝らすことしか頭にない詩人や文学を社交の道具としか見なさないひとひどが戯画化して描かれる。主人公は先述の信念に従い彼等の文学を批判するが、文学は神を讃えるべきものという彼の主張は、周囲の失笑を買うのみである。

その後、フリードリヒは皇太子を中心とする国家改革のサークルに参加する。フリードリヒは言う。

… mein Leben gehört Gott und meinem rechtmäßigen Herrn.  
(HKA. III 178.)

また、物語中に以下の記述がある。

Sie arbeiten fleissig, hoffend und glaubend, dem alten Recht in der engen Zeit Luft zu machen, auf Tod und Leben bereit.  
(HKA. III 182.)

この二つの引用から、彼等の言う「古い正義」が神と正統な君主の支配であることがわかる。ブルゴーニュ公に仕えた一五世紀の史家シャトランは、貴族の間で騎士道の理想がすたれつつあることを嘆き、教会と王国の安泰は貴族の双肩にかかっている、と説く。<sup>13)</sup> ホイジンガの『中世の秋』では、シャトランは、生地フランドルの市民層の勃興を無視して騎士道精神を大げさに礼讃した、と批判的に紹介される。しかし、このシャトランの主張に照らすと、国家改革のサークルへの参加は主人公の信奉する騎士道の理想にかなっていることがわかる。ただし、皇太子が町娘やローザを誘惑し、他の仲間も賭博や恋愛沙汰に夢中になりだすなど、彼等の熱意はかりそめで、ひとり研究に没頭する主人公は孤立する。<sup>14)</sup>

この状況下でフリードリヒがことに批判するのが、無神論者を装いつつ

こっそり教会に行く人々、熱烈な護教論者よろしく無神論者を攻撃するが実は神など信じない人々という二種類の「宗教道化」(Religionsnarr. HKA. III 208.)、すなわち、宗教的に墮落した貴族たちである。文学においても政治においても、フリードリヒはキリスト教信仰の観点から首都の貴族の墮落を批判する。それは、彼にとっては文学も政治も神の栄光を世に行わせるためのものであり、それに参画することが貴族の使命であるにもかかわらず、彼と出自を同じくする貴族たちが自らの使命を放棄して顧みず、キリスト教信仰と騎士道精神に基く彼の生き方を受け入れないからである。彼が首都での生活に絶望するのも正にこのゆえに他ならない。

しかし、彼はその逆境の打開を試みぬまま<sup>15)</sup>山地の住民の反乱に身を投ずる。自分の属する君主のために外国の支配者と戦うことで、彼は「武勇と忠誠を尚ぶ騎士道<sup>16)</sup> = 戦士の理想」を実現したかに見えるが、戦いに敗れることでそれも挫折する。第三の滞在地である生まれ故郷の城にたどりついたフリードリヒは宗教的考察を続け、修道院に入る。

この物語は、信仰生活に救いを見出した主人公が修道院に入る所で終るが、彼の言動・行動は一貫して騎士道の理想に基いており、その背景となる少年時代に獲得したキリスト教信仰も、変らず維持される。<sup>17)</sup>そして、主人公はすべての試みに挫折するが、信仰のみは守り通したので、最終的に信仰生活に救いを見出し得たのである。このような主人公の姿は、キリスト教信仰に貫かれた中世の騎士の理想像に他ならない。<sup>18)</sup>また、フリードリヒの遍歴の主要な滞在地のうち、彼がその理想の危機を知らずに幸福な時を過したレオンティンの城とA氏の館、聖書に没頭して信仰に救いを見出した生まれ故郷の城が自然のなかにあること、さまざまな試みに挫折した滞在地が都市(首都)であることにも注意したい。<sup>19)</sup>首都にいるフリードリヒにA氏の領地から手紙が届くが、読後の彼の意識のなかでは、変らぬ生活のなかで神を讃える人々の住む自然が、宗教的に墮落した都市の対

極にはっきりと位置づけられている (HKA. III 211.)。

### III

IIで検証したように、首都は、主人公に己の理想の危機を感じさせる場所、という機能を担っている。彼はローザを追って首都に来るが、彼女を首都に連れて来るのはローマーナである。したがって、間接的にはあるが彼はローマーナによって首都に導かれたことになる。

ローマーナは、主人公をわがものにしようとする再三にわたり誘惑したり罠をしかけたりするが、男を誘惑し破滅に導くという彼女の属性は、第二部の冒頭からくり返し目につく。まず、第一二章でローマーナがローザに聞かせる少女時代の思い出である。それによると、森で道に迷ったローマーナは一人の若者に城まで送ってもらう。記念の品が欲しいという若者に彼女は指環を与える。雪どけのころ庭に出ていたローマーナは川の向うにその若者を見つけるが、彼女の所へ来ようとした若者は、増水した川に馬もろとも吞まれてしまう。次には、フリードリヒがローマーナと知りあうお茶会で彼女が朗唱する長編の詩が、永遠に男を誘惑しつづける女性を詠んだものであること (HKA. III 147ff.)。第三には、町娘をなぐさみものにして捨てたことを主人公に難詰された皇太子の「最初に私をだめにしたのはローマーナだ」 (HKA. III 214.) という弁解である。とくに、第二の例として挙げた詩は、歌い手がローマーナであること、詠まれている女性が誰なのかと人々が話しあうなか、フリードリヒが「彼女はローマーナ自身なのかもしれないと思った」 (HKA. III 153.) ことが詩の直後に明記されていること、また、女性が永遠に男たちを自分の城に惹きつけるというその詩の内容が、ローマーナの処女時代の回想と類似していることなど、<sup>20)</sup> 二重三重にローマーナと関係をもっている。

もう一つ、ローマーナと分かちがたく結びついているのが、「南欧の」

(welsch)「イタリアの」(italienisch)「異国の」(ausländisch)といった語に共通するイメージである。フリードリヒも見ている活人画で、ロマーナはキリスト教の光明の前に石と化す「ギリシャの」女神を演ずる。

Höchstanziehend und zurückstoßend zugleich erschien ihm (Friedrich) dagegen ihre (Rosas) Nachbarin, die junge Gräfin Romana, welche er sogleich für die *griechische* Figur in dem Tableau erkannte, und die daher heute allgemein die schöne *Heydinn* genannt wurde. Ihre Schönheit war ... *südtlich* ... und überstrahlte Rosa's mehr *deutsche* Bildung weit. (HKA. III 146.)<sup>21)</sup>

その際のロマーナは人々から「異教徒」と呼ばれ、その美しさは「南国的」と形容される。そして、これらの語は明らかに「ドイツ的」という語とは対照的に使用されている。

Die Gräfin, die zuletzt mit ihrem schönen, begeisterten Gesicht einer *welschen* Improvisatorin gleich, unterbrach sich hier plötzlich selber, ... (HKA. III 152.)

また、長編の詩を朗唱する彼女は「南欧の」即興詩人にたとえられる。以上はロマーナ自身についての検証である。彼女の居住する空間についても同様のことが認められる。

Es war nämlich eine große Terasse, die nach *italiänischer* Art über das Dach des Schlosses gieng. Ringsum an der Gallerie standen Orangenbäume und hohen *ausländischen* Blumen, ... (HKA. III 171.)

これは、フリードリヒが招かれたロマーナの城館の屋上庭園の描写であるが、ここにも「イタリア式」「異国種」の語が現れる。しかも、彼女はそこにいるのが一番のお気に入りだと言う。



Die Bäume rauschten vor demselben (dem offenen Fenster), ...  
dazwischen hörte er *ausländische* Vögel draussen im Garten in  
wunderlichen Tönen immerfort wie im Traume sprechen, ...

(HKA. III 173ff.)

寝室に下りて来る時、月光に青白く照されたローマナの顔にフリードリヒは恐れを感じずが、彼が床についた時、開いた窓から人々のざわめきにまじって聞こえてくるのは「異国種」の鳥の鳴き声であり、青白いローマナの顔が彼の脳裏を離れない。このように、ローマナ自身とその周辺・付属物の描写には「南欧」「ギリシャ」「異国」「イタリア」「異教」といった語がしきりにくり返される。

男を誘惑する若くて美しい女性、その女性が時おり見せる死人のように青白い表情、「イタリア」「異国」などの語との結合は、アイヒェンドルフの他の作品にも見出される。たとえば、ティークの『忠実なエックルトとタンネンホイザー』（1799）と『金髪のエックベルト』（1797）、特に前者の影響を受けて成立した最初期の散文作品『秋の惑わし』（1809年成立、生前未発表）で、ライムントは、ひそかにあこがれていた若く美しい女性（魔の姫君）の頼みで友人を殺した後、彼女の城で共に暮らすか、ある夜、眠っている姫君が見せたぞっとするほど青白い顔つきに恐怖して城を逃げ出す。

Laßt mich nun schweigen von der Pracht der Gemächer, dem Dufte  
*ausländischer* Blumen und Bäume, ...

(W. II 520.)

これはライムントがウバルドに語る回想の一部であるが、ライムントを誘惑する魔の姫君と結びついて「異国の」花や木々の記述が見出せる。タンホイザー伝説のヴァリエーションである点で『秋の惑わし』と強いかわりのある『大理石像』（1819）で、フローリオは、ある夜池のほとりで見た

ヴィーナス像が、今にも生命を得て動き出すほど美しく見えたのに、次の瞬間には恐ろしいばかりに青白く不動のものに見える、という体験をするが、そのヴィーナス像にそっくりの女性が庭でリュートをかき鳴らす情景で、次のような描写がなされる。

Hohe Buchenhallen empfinden ihn (Florio) da mit ihren feierlichen Schatten, zwischen denen *goldene* Vögel wie abgewehrte Blüten hin und wieder flatterten, während *große seltsame* Blumen ... in dem leisen Winde hin und her schwankten. (W. II 540.)

ここでは「金色の」「不思議な」という形容詞が用いられるのみであるが、作品の舞台が他ならぬイタリアのルッカであることを考えれば、これらの語は、ローマナや魔の姫君・それらの周辺を形容する語群と同列に置くことが可能であろう。

『のらくら者の生涯から』(1826)で、山の城を抜け出した主人公がローマにたどり着いたとき、町の前に広がる原野を前にして、「ヴェーヌスがここに埋って、昔の異教徒どもが夜な夜な現れては旅人をたぶらかすんだそうだ」(W. II 613.)と言う箇所がある。また、わけのわからぬ騒ぎにまき込まれた後でローマを去るのらくら者は、イタリアのことを「まやかしのイタリア」(das falsche Italien. W. II 630.)と言う。キリスト教がヨーロッパ世界を席卷した時、キリスト教以前の神話の神々や民間神仰の精霊は少数の例外を除いて駆逐され、美・豊穡・愛の女神であったヴィーナスも淫乱と誘惑の魔女ヴェーヌスにおとしめられた。<sup>22)</sup> ドイツ文学において伝統的に異教とエロチシズムを含意するイタリアは、アイヒェンドルフの文学においてはキリスト教と敵対するあらゆる力の根源である、とシュヴァルツは言う。<sup>23)</sup> 「誘惑」という属性に「南欧」「イタリア」「異教」など一連の語にまつわるイメージが重なる時、ローマナは、アイヒェンドルフの文学

によく現れる「異教の魔女ヴェーヌス」の権化とも言うべき女性像のヴァリエーションの一つであることが、明らかになる。<sup>24)</sup>

## 結

このように、フリードリヒとローマーナを中心に『予感と現在』を読むと、一見雑然とした物語に「キリスト教——ドイツ——自然」と「異教——イタリア（南欧）——都市」という対立構造が存在することが明らかになる。<sup>25)</sup> この対立のなかで、熱烈なキリスト教信仰を保ち中世騎士道の理想を体現したフリードリヒは信仰生活に救いを見出し、ヴェーヌスの権化ローマーナは彼を我がものにしようとして果さず、自殺する。物語の結末近くで主人公は言う。

Licht und Schatten ringen noch ungeschieden in wunderbaren Massen gewaltig miteinander, … — Wunder werden zuletzt geschehen um der Gerechten willen, bis endlich … die Erde hebt sich … in Glorie empor. (HKA. III 333f.)

光と影の格闘の後に正義の者のために奇跡が起こる、というこの言葉には、キリスト教と異教の闘争、その後に来るキリスト教の勝利への主人公の希望が読み取れるが、このことを先に述べた物語の展開と考え合わせる時、『予感と現在』全体を、キリスト教と異教、異教に対するキリスト教の勝利への希望の寓話と見なすことが可能になるのではないだろうか。このことについては機会を改めてアイヒェンドルフのキリスト教思想、作品の成立当時の歴史的背景などのかかわりから考察することにしたい。

## 使用テキスト

Eichendorff, Joseph Freiherr von: Sämtliche Werke. Hist.-krit. Ausg. Stuttgart (Kohlhammer) 1908ff.

Eichendorff, Joseph von: Werke in 5 Bden. München (Winkler) 1970ff.

アイヒェンドルフの作品からの引用は、主として批判校訂版全集(HKA.)を用い、ヴィンクラ―版の著作集(W.)で補う。それぞれ巻数をローマ数字、頁数を算用数字で示す。

例) HKA. III 427. W. II 527.

### 参 考 文 献

Zons, Reimar Stephan: „Schweifen“. Eichendorffs „Ahnung und Gegenwart“. In: Eichendorff und die Spätromantik (EuS). Hrsg. von Hans-Georg Pott. Paderborn (Schöningh) 1985. S. 39-68.

Lüth, Christoph: Arbeit und Bildung in der Bildungstheorie Wilhelm von Humbolds und Eichendorffs. Zur Auseinandersetzung Humbolds und Eichendorffs mit dem Erziehungsbegriff der Aufklärung. In: Eus. S. 181-204.

Hoffmeister, Gerhard: Nachwort zu: Ahnung und Gegenwart. Joseph von Eichendorff. Hrsg. von Gerhard Hoffmeister. Stuttgart (Reclam) 1984. S. 383-403.

Riley, Thomas A.: Die Allegorie in „Ahnung und Gegenwart“. In: AURORA 44 (1984). S. 23-31.

Schwarz, Egon: Joseph von Eichendorff: Ahnung und Gegenwart (1815). In: Romane und Erzählungen der deutschen Romantik. Hrsg. von Paul Michael Lützeler. Stuttgart (Reclam) 1981. S. 302-324.

Riley, Thomas: Joseph Görres und die Allegorie in „Ahnung und Gegenwart“. In: AURORA 21 (1961). S. 57-63.

Hillach, Ansgar/Krabiell, Klaus-Dieter: Eichendorff-Kommentar in 2 Bden. München (Winkler) 1971ff.

Selbmann, Rolf: Der deutsche Bildungsroman. Stuttgart (Metzler) 1984.

Rasch, Wolfdietrich: Zum Verhältnis der Romantik zur Aufklärung In: Romantik. Hrsg. von Ernst Ribbat. Königstein (Athenäum) 1979. S. 7-21.

Huizinga, Johan: Herbst des Mittelalters. Übersetzt von Kurt Köster. 11. Aufl. Stuttgart (Kröner) 1975.

Heine, Heinrich: Elementargeister. In: Sämtliche Schriften. Bd. 3. Hrsg. von Karl Pörnbacher. München (Hanser) 1971. S. 643-703.

ファン・ヴィンター (佐藤牧夫・渡辺治雄訳): 騎士・その理想と現実 (東京書籍) 1987 (第二刷)

プレティヒャ (平尾浩三訳): 中世への旅騎士と城 (白水社) 1985 (第七刷)

ブリュフォード (上西川原訳): 一八世紀のドイツ——ゲーテ時代の社会的背景—— (三修社) 1980 (新装第一版)

## 註

- 1) ブリュフォード, pp. 66. 参照。
- 2) このことは、首都に着いた主人公が大臣の P 氏を訪ねる際の「大学を去る時に旅の予定をこまかに書き込んだ手帳」「大臣 P 氏宛ての紹介状」(共に HKA. III 136.) などの部分から知ることができる。
- 3) Vgl. Hoffmeister. S. 387. und Schwarz. S. 304.
- 4) Vgl. Rasch. S. 16.
- 5) 本論文 II の項を参照されたし。
- 6) 引用文中のイタリック体による強調はすべて本論文の筆者による。以下同様。
- 7) Vgl. Lüth. S. 195ff.  
リュートは、アイヒェンドルフの例として『予感と現在』のこのフリードリヒの回想を引用する。ただし、ハンブルク旅行(1805)当時のアイヒェンドルフの日記では、カンペやロビンソン物語が少年時代の幸福な思い出と結びつけられていることから、アイヒェンドルフとフリードリヒの見解を無条件で同一視することをせず、アイヒェンドルフがカンペ流の啓蒙主義教育を批判するのは『予感と現在』の執筆以降のことであるとしている。
- 8) Vgl. HKA. III 55.  
ただし家庭教師のこの行為は信仰に基づくものではなく、教育の一つの方便にすぎない。このことは、「受難物語をとうに知っている家庭教師がさしたる感動も示さず平静に生活していた」というフリードリヒの回想からも明らかである。
- 9) Hillach/Krabiel: Bd. 1 S. 116.  
第三部冒頭の山地住民の反乱の歴史的背景は、フランスの支配に対して起った 1809 年のティロル住民の蜂起である。『予感と現在』の舞台が解放戦争直前のドイツであることは、このことから推察される。
- 10) プレティヒャ, p. 18. 参照。
- 11) Vgl. W. I 900ff.
- 12) Vgl. Zons. S. 40.  
ファーバーが職業詩人であることはその主張からもわかる。職業詩人であるファーバーの文芸はフリードリヒやレオンティンの自由な文芸の対極にあるのであるとツォンスは言う。
- 13) Vgl. Huizinga. S. 75.
- 14) Vgl. HKA. III 180., 191., und 207.  
このことに関して、「彼は研究に没頭した」という記述が三回にわたって現れる。
- 15) 逆境の打開を試みないのは主人公の特徴である。文学観を笑われると「自分一人で楽しむことには満足できなくなって」(HKA. III 180.) 国家改革のサークルに参加し、ローマナの罌を逃れて首都を脱出することで改革への参加も

- ローザへの愛も立ち消えになる。
- 16) プレティヒャ, p. 18. ファン・ウィンター-p. 81. 参照。
- 17) Vgl. Hoffmeister. S. 388.  
フリードリヒには師にあたる人物・成長を促す影響が欠けている, というヴァイト (G. Weydt) の指摘を受けて, 「フリードリヒの世界観は冒頭から固定されており, 彼は成長する必要はなく, ただ判断を下し, ものごとを明確に認識するだけでよい」とホフマイスターは言う。
- 18) Vgl. Schwarz. S. 313. und Riley. 1984. S. 27ff.  
リーライは, この小説の主要な三人の男性登場人物のフリードリヒ・レオンティン・ルドルフをアイヒェンドルフの著作で一括して言及されることの多い「信仰・ファンタジー・悟性」をそれぞれ表す寓意的人物である, としている。
- 19) Vgl. Zons. S. 40.  
ゾンスは, ロマーナとのかかわりにおいて, 首都を「自由な自然」(freie Natur) の対極をなす「誤認」(Verkennung)「誘惑」(Verführung)「官能」(Sexualität) の場である, としている。
- 20) Vgl. Riley. 1961. S. 57ff. und S. 59ff.  
このことを詳しく検証しているのがリーライである。彼は, ロマーナの朗唱する長編の詩がゲレスの論文『ドイツ民衆本』の影響下に成立したものであることを論証して, この詩の永遠に男を誘惑し続ける女性が「ファンタジー」を表す寓意的人物であるとし, ポエジー(アイヒェンドルフは「ファンタジー」と呼ぶ)の庭に立って男(詩人)を惹きつける, というこの女性とロマーナの共通性, 1804年から翌年にかけて雑誌「アウローラ」(アイヒェンドルフ協会の年鑑とは別)に寄稿されたゲレスの論文中の寓意的人物「ポエジー」とロマーナの類似から, ロマーナにも「ファンタジー」の役割を認める。
- 21) 引用文中の括弧内の註記は本論文の筆者による。以下同様。
- 22) Vgl. Heine. S. 691ff.  
魔女ヴェーヌスとしてのヴィーナスは, プレンターノ・アルニム編の『少年の不思議の角笛』(1806/1808)やグリム兄弟編の『ドイツ伝説集』(1816/1818)に取められたタンホイザー伝説に典型的に見られる。ハイネの『自然の精霊』には『角笛』の『タンホイザー』とほとんど同じ詩が挿入されている。
- 23) Vgl. Schwarz. S. 315ff.
- 24) Vgl. Riley. 1961. S. 60.  
アイヒェンドルフにおける「ファンタジー」を表す女性がゲレスのそれとは異なり「誘惑」を伴う危険なものになった理由として, リーライは, F. シュレーゲル (1808年改宗) のカトリック主義の影響を挙げる。
- 25) このイタリアはキリスト教以前のイタリアである。カトリックの総本山ローマのあるイタリアがなぜアイヒェンドルフにおいて異教と結び付くかについては稿を改めて論じたい。

## Ein Versuch zu Eichendorffs „Ahnung und Gegenwart“

— Christentum und Heidentum —

Michihiko TANJI

In Eichendorffs Erstlingsroman „Ahnung und Gegenwart“ sind viele Gedichte und Episoden eingefügt, und seine Handlung ist sehr kompliziert. Es gibt aber die Spuren fürs Verstehen dieses Romans: der Held ohne Entwicklung, eine Frau, die ein bestimmtes Bild mit sich bringt. Es ist das Ziel dieses Aufsatzes, mit dem Hinweis auf diese zwei Punkte „Ahnung und Gegenwart“ zu lesen.

Friedrich, der Held dieses Romans, ist Dichter und gläubiger Adeliger, und sein Leben ist vom christlichen Glauben stark bestimmt. Dichten und Teilnehmen an der Politik sollen ihm dazu dienen, Gottesglorie auf Erden zu verkünden. Mit dem Wort „ritterlich“, oder „deutsch“ erwähnt er sein Ideal. Er erhält sich diese Meinung und seinen Glauben den ganzen Verlauf der Handlung hindurch und ist deshalb dem Idealbild des mittelalterlichen Ritters vergleichbar. Auf dem Schloß Leontins und im Gut vom Herrn A. dichtet Friedrich ohne Sorge viele Gedichte und Erzählungen. In der Residenz sind die Adelige im religiösen Sinne verdorben und verachten sein Ideal. Friedrich scheitert dort bei allen Versuchen. Er erreicht am Ende die Ruine des Schlosses seiner Familie in der Heimat, vertieft sich in die Bibel und zieht ins Kloster zurück. Der erste Aufenthaltsort, an dem er glücklich ist, und der dritte, worin er die Rettung findet, liegen in der Natur, und der zweite, in dem er die Gefahr seines Ideals fühlt, ist die Stadt.

Friedrich wird, zwar indirekt, von Romana in die Residenz geführt.

Sie will sich den Helden zu eigen machen und stellt dreimal eine Falle, aber er entläuft jedes Mal daraus. Ihr Attribut „Verlocken“ kann man von ihrem Auftritt mehrmals finden. Um Romana selbst und ihre Umgebung zu beschreiben, gebraucht Eichendorff wiederholt die Wörter: „italienisch“, „ausländisch“, „Heidin“, „welsch“ usw. Italien ist, nach Egon Schwarz, in der Eichendorffschen Literatur der Ursprung aller dem Christentum feindlichen Kräfte. Wenn Romanas Attribut „Verführen“ mit dem Bild zusammenfällt, das die Wiederholung dieser Wörter hervorrufft, dann kann man sie mit der „verführenden Venus“ der Tannhäuser-Legende vergleichen.

Auf diese Weise gelesen, wird es klar, daß in „Ahnung und Gegenwart“ die Gegenüberstellung zwischen „Christentum — Deutschland — Natur“ und „Heidentum — Italien (Welschland) — Stadt“ liegt. Gerade in dieser Gegenüberstellung wird der gläubige Friedrich, der das mittelalterliche Ritterideal verkörpert, am Ende gerettet, und Romana, die wiedergekommene heidnische Göttin Venus, geht unter. Wenn man sich dies vor Augen hält, so ist es möglich, „Ahnung und Gegenwart“ als eine Allegorie des Kampfs zwischen dem Christentum und dem Heidentum, des Siegs des Christentums gegen das Heidentum zu lesen.